

とおのものがたり

遠野物語

やなぎたくにお

柳田国男

五七

かっぱ あしあと

川の岸の砂の上には川童の足跡というものを見ること
決して珍しからず。雨の日の翌日などは「と」に「この事あり。」

猿の足と同じく親指は離れて人間の手の跡に似たり。長さ
さは三寸に足らず。指先のあとは人ののように明らかには
見えずという。

五八

こがらせがわ おぼこぶち へん しんや うち いえ

小鳥瀬川の姥子淵の辺に、新屋の家という家あり。あ

ふち

うまひき

ほか

る日淵へ馬を冷やしに行き、馬曳の子は外へ遊びに行き

あいだ かつばい

し間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて

うまぢ

うまふね

馬に引きずられて 厩の前に来たり、馬槽に覆われてあ

うまふね

りき。家のもの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて

かつば い

見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて殺さんか

ゆる

ひょうぎ

いたざり

宥さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯を

かた

かつば

せぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童

あいざわ たき ふち

今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりという。

◆ 本テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストから抜粋し、

一部加工したものです。

「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)